



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3918号 2017.9.25 発行

福祉のイメージ向上に“きらり人。” 茨城県社協、第1号に高3女子

県社会福祉協議会（関正夫会長、水戸市千波町）が「福祉」に携わる職員の人材発掘とイメージアップを狙った「ふくし“きらり人。”」第1号に、県立古河二高福祉科3年、岩田明日香さん（18）が選ばれた。岩田さんは「若い人たちが活躍することで福祉のイメージアップにつながればうれしい」と語る。

八千代町に4世代の大家族で暮らす。幼少時からかわいがってもらった“大きいじいちゃん”の曾祖父と大の仲良し。介護にあたる祖母を手助けしようと、同校福祉科に進学した。自宅で曾祖父の着替えなど介護を手伝うほか、「介護現場でも勉強したい」と町内の特別養護老人ホームでのアルバイトも続けてきた。「きらり人。」への応募はこの施設からの推薦。卒業後は大学に進学し、「社会福祉士」の資格取得をめざす。

岩田さんの福祉への取り組みが「若さと元気が明るい介護のイメージにつながる」（県社協）として採用の決め手となった。デビューは11月8日に常総市で開かれる県社会福祉大会。「自分の言葉で、福祉のやりがいについてPRしたい」と抱負を語った。（田中千裕）

本格カレー、障害者と触れ合う場に 京都、支援施設が開店



京都新聞 2017年9月25日
京阪六地藏駅前にオープンした「66カレー」（京都市伏見区）

京都市伏見区桃山町の京阪六地藏駅前で、障害者就労支援施設の運営によるカレーショップ「66（ロクロク）カレー」がオープンした。スタッフの手ほどきを受けながら、障害者たちが20種類のスパイスの調合を行い、まろやかな辛さの本格カレーを提供している。

身体、精神障害者20人が利用する「ワークスタジオ伏見」が、7月に開業した。施設は5月に運営を開始し、当初はパソコンを使った事務作業を請け負っていたが、利用者から「市民と直接触れ合う形で働きたい」との声が上がり、カレーショップを立ち上げることになった。

施設スタッフが6月から1カ月間、大阪市内のカレー店へ修行に出向き、調理法を習得。障害者らはチキンイオンをベースにクミンやコリアンダー、ターメリック

などのスパイスを調合するなど仕込み作業や接客を手伝っている。

メニューは、ポーク、チキン、ウインナーの3種類から選ぶ「66カレー」で、値段は660円（税込み）。現在は新たなトッピングも考案中で、660円という価格にこだわり、メニューの幅を広げていく。

同店は今後、店周辺の企業、事業所への配達サービスに乗り出す方針。同施設の管理者、大倉公志さん（40）は「来客の笑顔を見ることで働くことの喜びを実感している。住民

へのPRを進め、地域に根ざした店になるよう、おいしいカレーを提供したい」と話す。
午前11時～午後2時（日、祝日休み）。同店075（644）7718。

「障害者の…」と前置きしないアート、「はじまりの美術館」 震災乗り越え、猪苗代の蔵を改装 なかのかおり ハフィントンポスト 2017年09月24日
福島県猪苗代町にある「十八間蔵」を改装した「はじまりの美術館」。障害ある人たちを支援してきた地元の社会福祉法人が、震災を乗り越え、2014年にオープンした。福祉とアート、地域の再生というテーマが交差する美術館を訪ねた。

障害者をサポートしてきた福祉法人、蔵を改装

東京から新幹線で郡山駅へ。磐越西線に乗り換えて40分ほどで猪苗代に着く。タクシーで少し行くと、そば店の向こうに大きな蔵があった。「はじまりの美術館」だ。中の展示スペースには、靴を脱いで入った。床には木のレンガが敷き詰められている。受付に座っていたのは、館長の岡部兼芳さん（43）。お客さんが来たら、自ら作品の説明もする。

美術館の成り立ちを聞いた。岡部さんは地元の社会福祉法人「安積愛育園」の事業所で、支援員として障害ある人の創作活動をサポートしていた。福祉作業所の手作業には向かない人たちと一緒に作品を作り、地域のギャラリーやイベントでお客さんに見てもらった。公募展に利用者のアートを出すと、入賞した。作品は2010年、パリで開かれた「アール・ブリュット・ジャポネ展」でも展示。アール・ブリュットは、フランス語で「生（き）の、加工されていない芸術」という意味で、芸術教育を受けていない人が、わき上がる衝動のままに表現したもの。

「こうした活動を通して、障害ある人の作品への評価を定着させる目的もあります」と岡部さん。日本財団（東京都）の助成で全国にアール・ブリュットの美術館を作る構想が持ち上がり、安積愛育園にも声がかかった。話し合ううち、新しい建物を建てるよりは、地域の価値ある建物を改修するプランになった。

岡部さんらが県内のいくつかの建物を見て、この「十八間蔵」にほれ込んだ。築130年。隣のそば店が管理し倉庫になっていたが、十八間（約33メートル）ある大きな梁の見事さに、「このまま朽ちていくのはもったいない」と思ったそうだ。

東日本震災で打撃、寄付で救われる

地理的にも、猪苗代は福島県の真ん中にあり、訪れやすい。アートを発信するのにちょうどいいと、この蔵に決まった。持ち主にも「活用してほしい」と言われ、建物を譲り受けた。

ところが準備を始めたばかりの2011年、東日本大震災が起きた。準備は中断してしまったが、復興のためにニューヨークで開かれた美術品オークションの売り上げが寄付されて基金ができた。はじまりの美術館が助成の第一号になった。

1年かけて蔵を改修した。建築時と同じように、くぎを使わない工法を使った。傷んでいた屋根を葺き替え、震災で落ちてしまった梁を直した。冬は雪の深い地域なので、土の壁を崩して断熱材を入れ、床暖房も。地元の人と一緒に、木のレンガを床に埋め込んだ。入館料は一般500円で、安積愛育園が運営する。

「障害者のアート」とは打ち出さず

2014年6月のオープン以来、口コミでのべ2万5000人以上が訪れた。企画展は年に3～4本。「障害者のアート」と全面に打ち出しているわけではない。参加している作家の中に、障害のある作家もいる。見に来てから、アール・ブリュットのコンセプトで作られた美術館だと知る人も多い。

私が訪ねた時は、「あなたが感じていることと、わたしが感じていることは、ちがうかもしれない展」が開かれていた（7月に終了）。7人の作家が参加し、福祉事業所で過ごす佐久間宏さんの名前もあった。佐久間さんは触ってじゃらじゃらするものが好きで、歴代の支援員が工夫して生み出した『じゃらじゃら』を作品として展示。袋や靴下にビー玉やパチ

ンコ玉を詰めたり、割りばしを束ねたり。私の5歳の娘も触って楽しみ、違いを確かめた。他に、視覚に障害のある美術家・光島貴之さんの、触れる絵画もあった。彫刻家・山本麻璃絵さんによる作品も、この展示では触ってもいいとされ、「立体的な作品を見ると、触ってみたいくなる」という衝動に促されていた。

現在、10月22日までは植物がテーマの展覧会「プランツ・プラネッツ」が開かれ、外の広場では木の枝を使って秘密基地を作るワークショップが随時ある。蔵の中にはお茶が飲めるスペースもあり、自由に立ち寄れる場になっている。

学芸員の大政愛さん(26)は「障害があるから違うのではなく、人はみんな違う。作品に対して、『福島』や『障害』という言葉に対して、人それぞれ感じ方は違います。堅苦しく障害者の理解を、と呼びかけるのではなく、楽しくアートを見に来て障害に関心を持ってもらえたら嬉しいです。この場所が、福祉やアート、地域の再生など、何かの『はじまり』になれば」と話している。



ダウン症児がショーで躍動 手作り衣装披露 高知市

高知新聞 2017年9月25日
ステージで手作り衣装を披露する親子(高知市の市立自由民権記念館)

ダウン症などの障害がある子どもや、その親らのグループが初めて企画したファッションショーが24日、高知市棧橋通4丁目の市立自由民権記念館で開かれた。自由な発想の衣装と、伸び伸びとしたパフォーマンスに約150人が拍手を送った。



ピポ・ユニバーサル駅伝 障害など超え、たすきつなぐ

毎日新聞 2017年9月25日
次走者に、笑顔でたすきを渡す近藤靖一郎さん(中央) =東京都新宿区で2017年9月24日午前11時34分、小川昌宏撮影

障害や年齢、国籍を超えたチームでたすきをつなぐ「第16回ピポ・ユニバーサル駅伝」(NPO法人コミュニケーション・スクエア21主催、毎日新聞社など後援)が24日、東京都新宿区の明治神宮外苑であり、選手ら約200人が参加して秋空の下を駆け抜けた。

<川崎市長選 150万人都市の行方> (下) 障害者スポーツが気軽に楽しめる環境を



東京新聞 2017年9月25日
空調設備のない体育館で練習する「川崎WSC」のメンバー=中原区で

二〇二〇年東京五輪・パラリンピックを機に、障害者や高齢者など誰もが暮らしやすい社会を目指す川崎市。障害者スポーツでは小学校で体験講座を開くなど普及に努めるが、障害者自身が気軽にスポーツを楽しめる環境が整っているとは言いがたい。

八月下旬。午後七時を過ぎても気温が三〇度を超えていたこの日、市のリハビリテーション福祉センター体育館(中原区井田三)で車い

すバスケットボールチーム「川崎WSC」が練習していた。

冷房設備がなく、玄関のドアは開けっ放し。小野寺章彦監督（57）は運動中の事故が原因で脊髄を傷め、体温調節がうまくできないため「暑い日はつらい」。コートは公式サイズより狭く、エレベーターは競技用の車いすでは乗れない。不満はあるが「定期的に使えるので、ここを拠点にしている」。

円盤を投げて距離などを競うフライングディスクの「川崎FDクラブ」代表を務める宮田正行さん（58）は、川崎区の自宅から電車とバスを乗り継ぎ、この体育館や隣接するグラウンドでの練習に通う。左半身にまひがあり、バス停から二十分かけて体育館まで歩く。競技に必要な道具を体育館に置いており、他所で練習するには運搬がネックになるという。

市によると、体育館は一九八一年、障害者の機能訓練施設との位置付けで整備された。障害者団体は無料で利用でき、現在三十七団体が登録している。

一方、各区にあるスポーツセンターの大体育室は月に一度、抽選で利用団体が決まるが、「車いすでの利用は床にシートを敷いてもらう」（多摩スポーツセンター）という施設もある。

障害者スポーツの関係者は異口同音に「川崎にも横浜ラポールのような施設が欲しい」と切望する。横浜市が設けたこのスポーツ文化センターは、リハビリテーション施設に隣接する。冷暖房完備のメインアリーナなどのほか、廊下には手すりがあり、点字ブロックの両端は弱視でも分かるように蛍光色のテープで強調されている。指定管理者によると、昨年度の個人利用者のうち約一割が、障害者でも介護人でもない一般利用者。

川崎市は、〇八年に策定した中原区井田地区の施設に関する再編整備計画で「障害者専用のスポーツ施設の整備を行う」とした。だが今年一月の改訂版では「障害者スポーツを取り巻く環境が変化してきていることを踏まえ、そのあり方について検討」との表現に。

「（専用施設整備の）計画を実施してほしい」との市民意見に対し、市は「障害のあるなしにかかわらず、誰もがスポーツに親しめる環境づくりを進めている」と回答。福田紀彦市長は「障害者の人たちだけという話は時代を逆行させている」「施設にバリアーがあっても人の思いやりでカバーしていく」と述べている。

市内外の施設で水泳などを楽しむ高津区の薄典子さん（62）は股関節に障害がある。「大会に出られるレベルになれば健常者と一緒に泳ぐのに抵抗がないかもしれない。でも例えば病気や事故で脚を失ったばかりの人はその姿を見られたくない。いつでも気兼ねなく練習でき、指導者がいる場所は必要だ」（小形佳奈）

また会えるといいね とっておきの音楽祭 栗原開催拍手で幕

河北新報 2017年9月25日
多彩なパフォーマンスが繰り広げられたステージ＝24日午後

15年間にわたって続いた障害者と健常者の交流イベント「とっておきの音楽祭 in くりはら」のラストステージが24日、栗原市のイオンスーパーセンター栗原志波姫店であった。来場者は閉幕を惜しみつつ、最後の公演を楽しんだ。

市内外の34組が歌やダンス、バンド演奏を発表。数々の多彩なプログラムに観客から歓声が上がった。

閉幕式では先天性の障害で右手の無い千葉貴利さん（35）＝仙台市＝がピアノ演奏を披露。栗原会場のテーマ曲「とっておきの愛の唄」を全員で合唱し、拍手で締めくくった。



同音楽祭の栗原開催は2003年に始まった。秋の恒例行事となったが、人手不足や資金難から今年限りで閉幕することになった。川嶋哲実行委員長は「ここまで続けられたのもボランティアや出演者のおかげ。この場でできたつながりを大切に、何かしらの企画を検討したい」と話した。

赤字の時も…福祉施設にバナナ60年 遺志継ぐ仲卸社長 佐藤秀男 朝日新聞 2017年9月24日



バナナを施設の職員に手渡す朱常分店（しゅうつねぶんでん）の西廻（にし）の直行社長（左）＝京都市下京区

バナナを60年近く、福祉施設に寄付し続けている青果仲卸会社が、京都にある。育ち盛り子どもたち、幼い頃はめったに食べられなかったというお年寄りたちが、「バナナ定期便」を楽しみにしている。

9月中旬、京都市内で116回目の「受納式」があった。フィリピン産バナナ2



36箱が、市内212の施設に引き渡された。

「朱常分店（しゅうつねぶんでん）」（京都市下京区）が定期便を始めたのは1959年。輸入自由化の1963年より前、バナナは甘くて栄養があって人気だったが、高価で手が届きにくかった。施設子どもたちに食べてほしくて、初代社長の故・内田松一さんが夏と冬の年2回、贈るようになった。



<ひと ゆめ みらい> 「若年認知症いたばしの会ポンテ」事務局・水野隆史さん（44） 東京新聞 2017年9月25日 「RUN伴2017 in いたばし」のスタート前に笑顔を見せる水野隆史さん＝板橋区役所前で

台風による雨に見舞われた今月十七日。板橋区で初めて、認知症患者がたすきをつなぐイベント「RUN伴（とも）2017 in いたばし」を開催した。区役所から、介護施設「クローバーのさと」までの約四キロ。五十～九十歳代の認知症患者十五人が、それぞれ三十～七百メートルずつ、かっぱ姿で走ったり歩いた。

中止も考えたが、ルートとなる商店街でチラシを配るなど、ともに準備してきた患者から「やりたい」と声上がり、決行した。

全ルートを患者さんらと走り、沿道の人々の応援やイベントを伝える商店街の放送を耳にした。「認知症の人と同じ人間として、地域で暮らしていることを感じてもらえた」と実感した。

参加した患者のうち八人は、六十四歳以下で発症した若年性認知症の人たち。区内にある地域包括支援センターに勤めていた二〇一五年に中心になって結成した「若年認知症い

たばしの会ポンテ」のメンバーだ。

当時、センターに来た四十歳代の若年性認知症の男性から「生活や仕事ができなくなり、居場所がない」と相談を受けた。働き盛りで発症すれば、家計が一気に苦しくなる。会員には、「稼げなくなって、家で肩身が狭い」など、共通の悩みもあった。

会は、患者九人とその家族が交流し、主に医療や介護に従事するボランティア約三十人が支える。「三年ぶりに笑った」と話す患者もいる。「きれいごとに聞こえるかもしれないが、皆が同じ仲間なんです」

患者のお漏らしや物忘れなどもあるが、ボランティアが、それぞれの特徴を覚えケアする。「働きたい」と願う元管理職の五十歳代男性患者がいた。真面目な性格だった。必死で探し出した高齢者施設の掃除などのパートを紹介すると、無事に定着できた。

山口県の出身。中央大法学部時代にサークルで障害者と出会い「裏表がなくて大好きだな」と福祉に目覚めた。卒業後に慶応大看護医療学部に入り直した。病院で看護師として約九年勤務した経験もある。今は、埼玉県和光市で暮らして医療関係の仕事に就く。二人の子どもの父親でもある。

「ポンテ」という会の名称は、イタリア語で「懸け橋」を意味する。患者と地域住民を結びたいという願いを込めた。「地域の人でも年を取り、いつか病気になる。病気になった人が暮らしやすい地域を住民とつくっていくのが大きな目標」 (増井のぞみ)

<若年認知症いたばしの会ポンテ> 患者とその家族向けに2カ月に1回、お茶会を開く。月数回、患者とボランティアが集い、ボウリングやカラオケなどを楽しんでいる。就労や病気の相談も乗る。問い合わせは水野さん＝電090(9315)6490＝へ。

負担増す民生委員に助っ人 協力員、高齢者宅訪問や現況把握



読売新聞 2017年9月25日
サロンの昼食時にお年寄りや協力委員と笑顔で話す民生委員の飯田さん(中央)。「ひ孫さんはおいくつになったの?」「食べ過ぎたらいかんよ」などと温かい会話が続いた(兵庫県伊丹市で)

「活動が大変そう」などのイメージで「なり手」の確保が全国的な課題となっている民生委員。一部の自治体では“助っ人”としてボランティアの協力員(協力委員)制度を設け、民生委員の負担軽減と、新たな「地域福祉の担い手」の発掘につなげている。

■ 1人につき2人

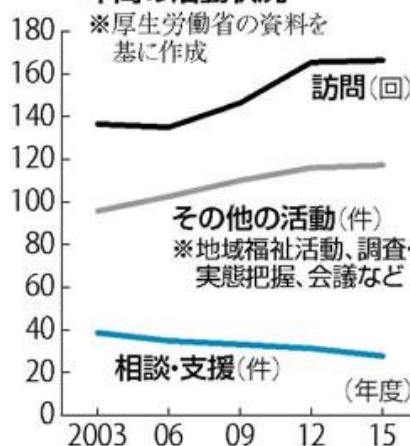
「このお料理、おいしい。来るのがいつも楽しみよ」。兵庫県伊丹市の集会所で月2回開かれる地域サロン「さくら会」。サケの野菜あんかけを食べた80歳代の女性の言葉に、同市の民生委員飯田 原子 さん(68)は「みんなでしゃべって、笑いながら食べるのが一番ね」と笑顔で応じた。

◆ 民生委員の年齢構成 (2012年)



サロンは高齢者の見守りなどのため、飯田さんら5人の民生委員を中心に運営されているが、買い出しや昼食の準備などは9人の協力委員の女性たちが担当する。昼食時は全員でお年寄りとテーブルを囲んで会話し、体調や生活ぶりに変化がないか、

◆ 民生委員1人当たりの年間の活動状況



さり気なく目配りする。

兵庫県は「地域をより多くの目で重層的に見守れるように」（社会福祉課）と1990年、地域で活動する民生委員を支えるボランティアとして協力委員を制度化した。民生委員1人につき2人まで配置し、サロン活動への協力や、高齢者宅の訪問、住民の生活状況の把握などを行っている。支援が必要な住民を把握したら速やかに民生委員に伝え、民生委員が対応する。

伊丹市では民生委員246人と、協力委員415人が活動中。同市地域・高年福祉課の野口晋吾さんは「民生委員も、自宅から離れた地域の状況は把握しにくい。気付いたことを民生委員に伝えるだけでも大きな支えになる」と話す。

飯田さんも、昨年12月に民生委員になる直前まで15年近く協力委員を務めた。「協力委員をやってきたので顔見知りのお年寄りも多く、スムーズにスタートできた」と話す。

■引き継ぎのため

「担当区域の75歳以上のお年寄りは120人。初めて会う人ばかりで、いきなり一人でやったら大変だった」。千葉市中央区の民生委員、石橋美恵子さん（67）は今年5、6月に実施した高齢者世帯の訪問調査を振り返った。調査は前任の民生委員の木田典子さん（75）と一緒にいった。木田さんは5期15年務めたベテラン。昨年12月、石橋さんに引き継ぐにあたって「慣れるまでは大変だから」と協力員を引き受けた。

訪問調査では健康状態や家族構成を確認し、一人暮らしなら家族の連絡先も聞く。『「初心者」にはなかなか気を許してもらえない』と石橋さん。会話の糸口を上手に見つける先輩に助けられた。

千葉市は2014年、「なり手」不足への危機感から、負担軽減と「地域福祉の担い手」の掘り起こしのため協力員制度を創設した。現在、約130人が活動し、民生委員の約1割が支援を受けている計算だ。70歳代が最も多く、木田さんのように引き継ぎのために務める人も目立つ。

同市地域福祉課の和田明光さんは「高齢者の孤立や孤独死が注目され、民生委員の負担は増している。なり手不足解消のためには、まずは負担軽減が必要だ」と説明する。

経験積んで後継者にも

全国民生委員児童委員連合会によると、協力員や協力委員を置く市区町村は全体の約9%と少ないが、メリットは大きい。

兵庫県の制度は民生委員の後継者育成が目的ではないが、伊丹市では昨年誕生した新任の民生委員48人のうち、13人が協力委員経験者だった。民生委員の活動を近くで見て、「もっと深く地域に関わってみようと考えてくれる人もいる」（野口さん）という。

高齢化に加え、近隣住民とのトラブルを抱える世帯など慎重な対応が必要なケースも珍しくはなく、民生委員を引き受ける際の心理的なハードルが高くなっている。民生委員の定数に対する充足率の全国平均は90%台後半と高いが「引き受けてもらうため、『特別なことはしなくていいから』と説得するケースもある」（関係者）との声も多く、なり手確保は綱渡りの状況だ。

全国社会福祉協議会の池上実・民生部長は「民生委員の活動をサポートする協力員の制度は、見守り活動の頻度を上げられるなど地域のメリットにつながる。地域の実情に合わせ、うまく活用してほしい」と話す。

＜民生委員＞ 民生委員法で定められた無報酬のボランティアで、児童福祉法が定める児童委員も兼ねる。全国約23万人のうち60歳以上が全体の8割で、女性が6対4の割合が多い。3年ごとの改選時に3分の1近くが入れ替わる状況が続いている。（滝沢康弘）

【トランプ政権】オバマケア見直し崖っぷち、米共和党で反対勢力が増加

共同通信 2017年9月25日

トランプ米政権が最優先課題とする医療保険制度改革（オバマケア）見直しに向けた新

たな法案を巡り、上院共和党内で反対勢力が24日増加し、週内に予定されている採決で否決される公算が大きくなった。米紙ワシントン・ポスト電子版は「崖っぷち」と伝えた。

共和党のコリンズ議員は24日、CNNテレビで「最終的に法案に賛成するというシナリオを描くのは非常に困難だ」と表明。法案が成立すれば、低所得の高齢者や障害児への支援に悪影響が出ると指摘した。

米メディアによると、クルーズ議員も24日、南部テキサス州のイベントで、現時点では法案に賛同しない考えを示した。

法案可決のためには定数100の上院で過半数の賛成が必要となる。共和党は52議席を握るが、先週までに共和党重鎮のマケイン議員やポール議員が反对方針を打ち出した。

【堺市長選】竹山氏、信任得るも課題山積 中心街活性化、交通網整備、対立した大阪府との連携は…

産経新聞 2017年9月25日

24日に投票された堺市長選。無所属現職の竹山修身（おさみ）氏（67）＝自民、民進、社民、日本のこころ推薦＝が、大阪維新の会公認の新人で元府議の永藤英機（ひでき）氏（41）を破り、3選を決めた。当日有権者数は68万8758人（男32万6454人、女36万2304人）、投票率44・31％（前回50・69％）だった。

当選を受け、竹山氏は堺市の事務所で「堺市民と一緒に元気に大阪をつくっていく。4年間誠心誠意がんばらせてもらう」と喜びを語った。

竹山氏は維新の看板政策「大阪都構想」反対のほか、子育て支援や福祉の充実など2期8年の実績をアピール。高齢者のためのおでかけ応援バスなど現在の取り組みを拡充させ、堺東駅前（堺市堺区）の再開発や泉北ニュータウンのリニューアルなどに着手することも訴えた。

当選が確実になり、花束を手に笑顔の竹山修身氏＝24日、堺市堺区（水島啓輔撮影）

市民にとって何がベストなのか

竹山氏の3選は、有権者が2期8年の実績を一定評価した上で、子育て支援や医療福祉施策など現在の取り組みの深化を望んだということに他ならない。その観点からいえば、3期目の4年間で堺市をさらに成長させられるか、竹山氏の責任は重い。

一方で、忘れてはならないのは、前回選挙よりも下がった投票率だ。大阪維新の会の看板政策「大阪都構想」の賛否をめぐり、竹山氏と維新候補が全面的に争った前回と異なり、維新が都構想を掲げなかった今回は明らかに盛り上がり欠けた。

都構想がなければ、有権者の市政への関心はあまり高くないとすら思える。選挙期間中、有権者から「何が争点になっているのか、よく分からない」との声もたびたび聞かれた。

都構想以外にも、堺東駅前などの中心市街地の活性化や泉北ニュータウンのまちづくり、交通網の整備など市が抱える課題は多い。竹山氏は今後、こうした課題にどう取り組むか、具体的な道筋を市民にしっかりと示していく必要がある。

また、今回の選挙で維新代表を務める松井一郎府知事と激しく対立したが、今後、百舌鳥（もず）・古市（ふるいち）古墳群の世界文化遺産登録や大阪モノレールの延伸など、府と協調して取り組まなければならないこともたくさんある。「府と連携していくところは連携していく」と竹山氏が述べたように、市民にとって何がベストかを考えながら、手を取り合うバランス感覚が求められそうだ。（堺支局 江森梓）

